



満蒙開拓青少年義勇軍

満州に送り出された子どもたち



満州に渡った義勇軍は、満州開拓青年義勇隊と呼ばれ、最初の3年間は、訓練所(大訓練所1年間、小訓練所2年間)で訓練を受けました。訓練所では、基本的には午前中は軍事訓練、午後は土地の開墾・農事訓練などに励みました。満州での生活は、実際には「憧れた満州」とはかなり隔たりがあり、「一番欲しいものは食べ物。とにかく腹が減って、腹が減って」、また他中隊との対立や殴り込み、先輩後輩の制裁行為、窃盗や窃盗品の売買、恐喝なども日常的にあったそうです。加えて多くの者がかかったアメーバ赤痢など伝染病のまん延、「零下40度位にな

義勇軍となった子どもたちは、
5 満州でどのような生活をしていたか

り、灯油がシャベット状になるほど寒い」冬の極寒生活など、子どもたちにはとても辛かったと体験者は証言しています。

しかし、手紙はすべて検閲され、「『食べ物』が少なくて腹が減る、訓練が辛いから家に帰りたい」などと書いた手紙は没収・破棄され、満州の義勇軍生活は楽しく安定した生活であるといったうそを書かないと手紙は家に届かなかった」のです。だから、日本の家族は、子どもたちは安定した生活を送っていると思っ

ていたようです。

しかし、上伊那出身者が多い原中隊で、子どもたちが、満州で空腹と寒気と物資不足で非常に苦勞をしていること

を察知した親が、父兄会を設立して支援しようという動きがあり、それが教育会で問題となりました。また、原中隊に限らず、我が子の安否を気

遣う父兄から、訓練所長宛に提出される訓練生の一時帰郷や退所願いの増加傾向に対して、それを危惧した長野県は各市町村長宛に、「些々なる

理由にて中途帰郷は誠に遺憾のようなことがに注意する事」を出しています。

少年にとって

義勇隊訓練所生

「長野県から送

隊は、成績優秀

中隊が数多く注

と、小池中隊長

身)が上伊那教

ています。鉄驢

は、18の中隊(人

程度)が集結

したが、長野県

保田中隊が総合

同じく小池中隊

那、諏訪)が第

で表彰されました

満州の義勇隊訓

非常に厳しく辛

が、子ども達は、

して励めば、独立

町歩の自作農とな

夢見て頑張ったの

「元上伊那教育会



義勇軍小池中隊水田班
(橋爪五郎氏所有写真)



義勇軍農作業の成果(写真集
長野県満州開拓史)より)

空腹と寒気と物資不足で苦勞